平凡社カラー新書 13

薔薇幻視

中井英夫

平凡社カラー新書 13

一瞬一刀視

中井英夫

目次

カラー　5

薔薇の迷宮　13

地下の薔薇園への招待　21

青の神秘について　29

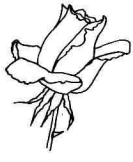
薔薇ならぬ薔薇の旅 I　40

パリ・バガテル　53

薔薇の[illegible]種　65

本文

薔薇連禱　68
薔薇ならぬ薔薇の旅II　101
地中海へ
薔薇を語る　前川文夫　116
小説・薔薇の罠　125
あとがき・薔薇への詫びごと　141



写真／佐藤 明　中井英夫　亘理俊次
画／直江博史
レイアウト／島津周夫

平凡社カラー新書13
薔薇幻視

1975年5月8日　初版第1刷発行

著者　中井英夫（なかいひでお）
発行者　下中邦彦
発行所　株式会社　平凡社
東京都千代田区四番町4番地
振替　東京　29639　番
電話　03—265—0451（代表）

印刷　株式会社東京印書館
製本　株式会社石津製本所

不良本は直接小社サービス課で
お取替え致します（送料小社負担）

©平凡社　1975　Printed in Japan

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

薔薇の迷宮

薔薇はふしぎな迷宮である
入ることを怖れてはならぬ
いまだにその謎は解かれず
なお深く薔薇は凍り薔薇は
眠り薔薇は夢み続けてきた
かりにどれほど薔薇を愛し
続けようとも、外側にたた
ずむ限り入口は見つからぬ
さあ出かけよう時間と空間
を超えた迷宮の内部の旅へ

薔薇に寄す

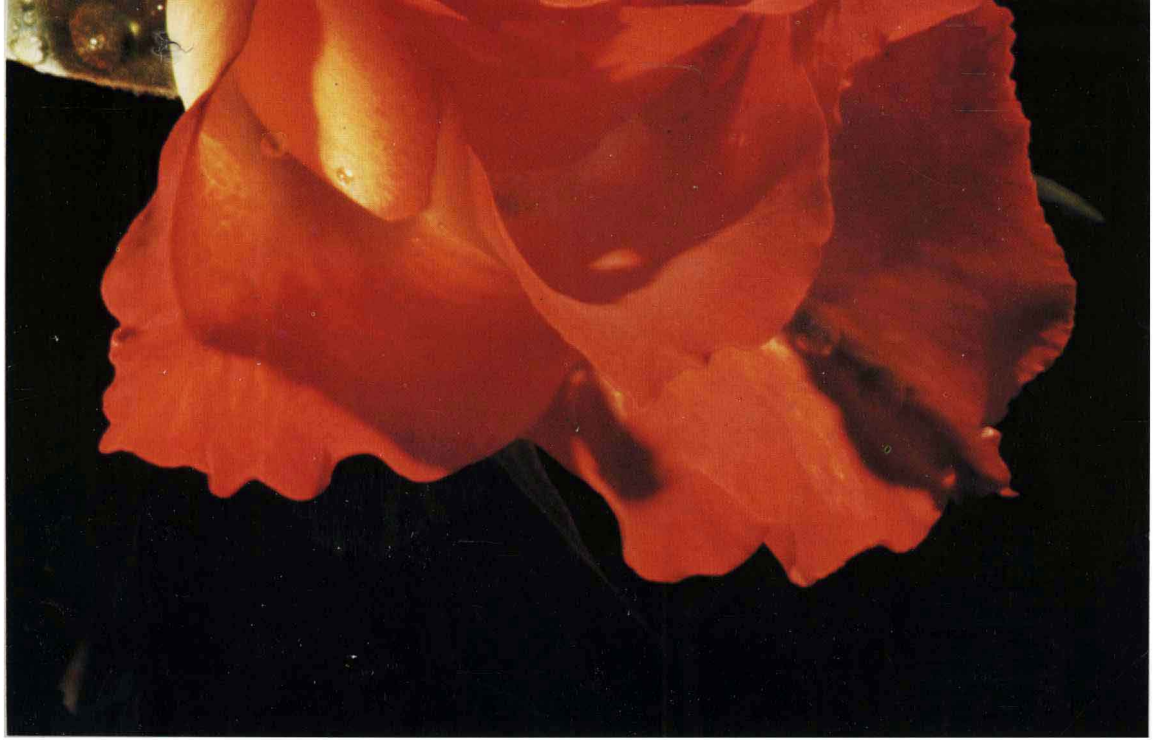
……
薔薇の少女よ
飛び降りてこよ

ま昼の月は
樹に青みたり

なはとびをせむ
草ゆひほそめ

古き石舗く
館のかげに

薔薇の少女よ
なはとびをせむ
……



此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

地下の薔薇園への招待

薔薇よもしそなたが美の女王なら二度と地上に咲いてはならぬ
薔薇よ空にひらけ薔薇よ虚空に浮かべ薔薇よいまこそ飛翔せよ
……
薔薇よもしそなたが美の女王なら二度と地上に咲いてはならぬ
薔薇よ地下に在れ薔薇よ滅びを
いそげ薔薇よいまこそ眠れかし
……

地下の薔薇園への招待

虚の薔薇・実の薔薇

ここに書こうとする薔薇は実在の薔薇ではない。それはいわば虚の薔薇、不在の薔薇であって、人によってはとりとめもない幻影のたぐいとしか思われぬことだろう。しかしこの地上にそもそも薔薇が咲き出たときから、それは二重に咲いていたのではないか、少なくとも現代において、なおそれは二重の意味を持って咲き続けているのではないかという思いから私は離れることが出来ない。

地表の薔薇、その陽光と風、水や肥料や手入れの方法については実用書が溢れていることだし、このシリーズにも企画されていると聞いた。薔薇作りとして素人にすぎぬ私が口を挟むことは何もない。しかし本郷の動坂に近く育ち、戦前の〝ばら新〟の庭に高々と咲きゆらぐクリムソン・グローリーの一花に魅せられてからというもの、私の内部にはいわば地下の暗黒に向って伸びる虚の薔薇がいつ知らず蔓り、それはいまも暗い輝きに充ちて咲き継いでいる。その地下の薔薇園にひととき御案内しようというのが本書の意図である。

植物学者の父は、日本の常で園芸を一段低いものに見做していたのか、家の庭には薔薇らしい薔薇を何ひとつ植えようとせず、僅かにクリムソン・ランブラー、貧弱な庚申薔薇が垣根を彩っているにすぎなかった。それでも六月になると、夕明りの中でそれは次第に紅を濃くしてゆき、長いたゆたいの刻を知らせた。そのなかに点る灯を合図に、羽虫たちの宴が始まる。まったく暮れきってしまうまでの、なんという物憂い時間。

……

薔薇の少女よ
飛び降りてこよ

ま昼の月は
樹に青みたり

なはとびをせむ
草ゆひほそめ

古き石舗く
館のかげに

薔薇の少女よ
なはとびをせむ
……

これはその少年の時分、わざと古めかしい小譚詩の形で庚申薔薇に寄せた詩である。

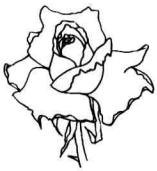
しかし地下の薔薇園へというとき、たぶん私の作業は、地表の薔薇のひとつひとつに点っていた灯りを消すことになるだろう。昨七四年の六月から七月にかけてフランスを訪れ、バガテル園の新種の薔薇コンクールや、あるいはライ・レ・ローズとかマルメゾンなど優雅をきわめた薔薇園を見て廻ったが、そこでも私の関心はおおむね薔薇の背景にあった。なぜこれほどまで美しい薔薇が存在するのかという問いに、品種の改良や気候風土をあげつらうのも一つの答には相違ないが、私が見ようとしたのはもっぱら薔薇を離れた、海であり街であり人間であり、時に人形でさえあった。従ってそれは〝薔薇ならぬ薔薇の旅〟とでも呼ぶ他はない。一種の感情旅行、といってスターンの底知れぬ豪快な笑いも好色も伴わぬ、裏返しの、陰画の旅である。それがまったくこの地上とは無縁な幻想旅行かといえばそれも違う。旅の間中、私の考え続けていたのは、なぜ日本に純粋な薔薇園、遊園地でもショウガーデンでもない無垢の薔薇園が存在しないのかという問題だったのだから。

千葉の谷津遊園と、大阪府の枚方パークが、いまのところ関東と関西を代表する二つといっていいだろうが、そのどちらもいまはむしろ菊人形で知られ、市民の憩いの

場と謳われるのに異議はないとしても、それは子供連れで芝生へ入りこみ、薔薇の根元でお弁当をひろげる行楽地でなくては適わぬのが実情である。観覧車やメリーゴーラウンドや、ひっきりなしにマイクから流される童謡がなぜ薔薇園に必要なのだろう。光と色彩は溢れるほどでも、それがまったき静謐に包まれている純粋な薔薇園のひとつを、どんな都市もまだ持っていないこと。その実情に薔薇愛好家ばかりではなく、市民のひとりひとりが一度も慄然としたことはないのだろうか。

むきになっていっても仕方はない。薔薇というものがそれほど日本人には馴染まれていないんだし、ささやかながら神代植物園にはその一画がある。同じ都の管轄でいうなら、そして薔薇でなくもっと一般的な菖蒲というなら、水元公園もあれば堀切菖蒲園だってという声も聞かれそうだ。この場合決まって口にされるのは、日本人にまだそこまではちょっとという、俄かに後進国めいたいい方であり、実際のところ国家がまず力を入れて後押しするのは米と麦、ついで果樹に蔬菜、花卉園芸などにうつつを抜かす東大卒など一人もいないという国柄である。薔薇ばかりではない、この国に幻想の本質はついに無縁であり、それはあらゆる文化に及んでいる。こう考えると地下への旅は、出かける前から徒労に終りそうだが、もともと空しいこと、役に立たぬことばかりを大事にし、地上の繁栄などに寸毫も寄与しない決意の下でなくては、どんな幻想も花ひらくことはあり得ないだろう。

かしこ、谷津遊園の五月に、フラウ・カール・ドルシュキーは池の畔りに純白の垣



此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton